

平成 28 年 7 月 1 日

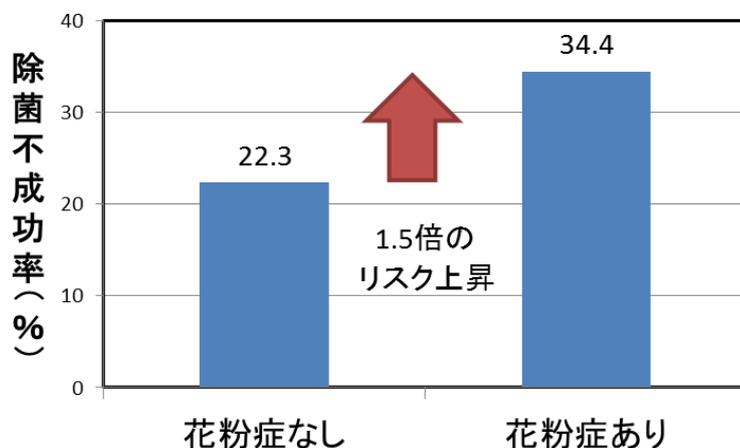
花粉症があるとピロリ菌除菌不成功率が 1.5 倍に

—日本内科学会英文誌「Internal Medicine」で 2016 年 7 月 1 日に発表—

花粉症のある人は、除菌不成功率が 34.4%であり、花粉症のない人に比べて、約 1.5 倍高い。花粉症患者はピロリ菌初回除菌を行う際には、除菌されにくい可能性があることを考慮に入れ、飲み忘れは絶対しない等、より注意深い服用を心がけることが必要。

【お問合せ先】浜松医科大学 健康社会医学講座 特任研究員 尾関佳代子
Tel: 053-435-2333 / Fax: 053-435-2341 / E-mail: kayo-oze@umin.ac.jp

花粉症があるとピロリ菌は除菌されにくい



※ 356 人のデータをもとに算出しています。

●研究の背景

胃がん、胃潰瘍の原因とされるヘリコバクター・ピロリ(*Helicobacter pylori*) (以下ピロリ菌)の除菌率を上げることは予防の観点からも最も重要な事項の1つです。

本研究では除菌失敗の患者側の要因として、近年増加しているアレルギー疾患を持つ患者に着目しました。またその中でも日本人の約25%が罹患しているとの報告があり、国民病とも言われている花粉症と除菌不成功との関連を検証することを目的としました。

●研究方法

平成25年4月から平成26年2月の間に、静岡県浜松市の消化器科クリニック(あさのクリニック)に隣接する1薬局(杏林堂薬局高塚調剤センター)に、ピロリ菌1次除菌薬(1日量 ランソプラゾール60mg、アモキシシリン1500mg、クラリスロマイシン800mgを1週間分)の処方箋を持ち来局した患者356名について、アンケートを用いてその患者の花粉症の有無を調査しました。また、除菌の成否についてはクリニックが判定を行いました。これらのデータを用い、1次除菌不成功に対し、花粉症の有無がどの程度影響を及ぼしているかを検討しました。

●結果の概要

花粉症の有無別除菌不成功率は全体として、花粉症のある患者(34.4%)が花粉症のない患者(23.3%)に比べ、統計学的に有意に高くなっていました。また花粉症のある患者は約1.5倍除菌されにくいリスクが高いことが明らかになりました。更に年齢の低い患者ほど、花粉症と不成功の関連が強くなっていました。

●本研究の意義

本研究は花粉症とピロリ菌除菌不成功の関連を明らかにした初めての研究です。そのメカニズムは、まだ検証には至っておりませんが、可能性としていくつか考えられます。

ひとつはピロリ菌の存在する胃内環境が挙げられます。花粉症患者は、アレルギーに関連したヒスタミン受容体の影響で、胃酸の分泌量が高い可能性が考えられます。胃酸が強いと除菌に使われる抗生物質の効きが悪くなり、除菌不成功へと繋がるかもしれません。また胃酸分泌量は若年者の方が高いとの報告があり、年齢の低い患者ほど、不成功との関連が強くなっていった結果と合っています。

別のメカニズムとして、免疫の関与等があります。花粉症患者は免疫系の司令塔である制御T細胞のバランスが崩れていて、その結果、ピロリ菌が増えた状態の持続をもたらしている可能性が考えられます。

今後、ピロリ菌初回除菌を行う花粉症患者は、除菌されにくい可能性があることを念頭に置き、飲み忘れは絶対しない等、より注意深い服用を心がけることが大切です。

【掲載誌】Internal Medicine Vol.55, No. 13, 2016 (2016年7月1日号)

【タイトル】Association of Hay Fever with the Failure of *Helicobacter pylori* Primary Eradication

【著者】尾関 佳代子 1)、古田 隆久 2)、浅野 道雄 3)、野田 龍也 4)、中村 美詠子 1)、柴田 陽介 1)、岡田 栄作 1)、尾島 俊之 1)

- 1) 浜松医科大学医学部 健康社会医学講座
- 2) 浜松医科大学医学部 臨床研究管理センター
- 3) あさのクリニック
- 4) 奈良県立医科大学 健康政策医学講座